

「お兄さま、あの……本当に、わたしはこれで十分です」

豪華な薔薇の刺繍が施されたソファアの真ん中で、わたしは縮こまりながら、目の前に差し出されたカタログをそっと押し返した。

わたしの前に跪き、まるで至高の宝物を扱うようにわたしの小さな手を包み込んでいるのは、長男のレスターお兄さまだ。冷徹で厳格、吸血鬼の一族を束ねる彼が、今は見たこともないほど眉を下げて困り果てている。

「何を言うんだ。今季のドレスの仕立てはまだ数着しか頼んでいない。宝石だって、お前の瞳と同じ色のトパーズしか贈れていないんだぞ」

「数着だなんてとんでもないです！ 毎日違うお洋服を着せていただいているだけで、夢のようです。……それに、わたしはただの孤児だった身ですから」

わたしが控えめに微笑むと、部屋のあちこちから、同時に重いため息が漏れた。

「またその話？ 本当、君は欲がないね」

呆れたような、でも酷く愛おしそうな声を上げて、次男のアランお兄さまがソファアの背もたれからわたしを覗き込んできた。流れるような、ウェーブがかった赤髪がわたしの頬をくすぐる。

アランお兄さまはわたしの肩に顎を乗せ、ずる賢い狐のように

目を細めた。

「俺たちがどれだけ君を甘やかしたいか、まだ分かってないの？ ほら、この真珠のティアアラなんてどう？ 君の白い肌に絶対に似合う。……ねえ、これ欲しいって言ってよ」

「アランお兄さま……。お気持ちだけで、胸がいっぱいで
す」

「ちっ、相変わらずつまんねえ遠慮してんじゃねえよ」

部屋の隅で腕を組んでいた三男のカインお兄さまが、苛立たように足音を荒げて近づいてきた。

「わッ……！」

乱暴にわたしの頭をガシガシと撫で回す。その手つきは不器用

だけれど、決してわたしを傷つけないように、爪が痛まないように、信じられないほど繊細に力加減がされている。

「お前はなあ、もっとワガママ言えがいいんだよ。『これが食べたい』とか『あそこへ連れて行け』とかさ。俺たちを頼るのが、そんなに嫌か？」

「嫌なわけありません！ カインお兄さま、怒らないでください……」

わたしが少し身を縮めると、カインお兄さまは「怒ってねえよ、バーカ」と耳を真っ赤にしてそっぽを向いた。

——わたしは、本当に、世界一幸せな孤児だと思う。

かつて天涯孤独だったわたしを拾ってくれたのは、母が違

い、かつては互いの首を獲り合おうと殺し合っていたという、恐ろしい三人の吸血鬼だ。

彼らの目的は、わたしの肉体を流れる『希少な血』だ。

この血は、稀血と呼ばれ、吸血鬼の吸血衝動を抑える唯一の鎮痛剤らしい。

けれど、彼らの館で過ごすうちに、いつしか血を吸われることへの恐怖は消え、彼らが向けてくれる眼差しは、冷酷な捕食者のそれから、過保護な『お兄さま』たちのものへと変わっていった。

わたしという共通の守るべき存在ができたことで、三人は殺し合うのをやめた。

今あるこの平穩。お兄さまたちの優しい温もり。それだけで、わたしの小さな器からは溢れてしまうほどの幸福なのだ。これ以上の贅沢を望んだら、きっと神様にバチが当たってしまう。

「わたしは、お兄さまたちがこうして一緒にいてくれるだけで、本当に、何もいらないんです」

わたしが心からの言葉を口にするのと、三人の兄たちは一瞬だけ目を見合わせ、それから降伏したように苦笑した。

「本当に、君には敵わないな」

アランお兄さまがわたしの髪にキスをする。

「お前がそう言うなら、これ以上無理強いはしない。だが、

いつでも頼ってくれ。俺たちは、お前のためにあるのだから」
レスターお兄さまが、わたしの手をそっと包み直す。

「……たく、お前がその気になったら、いつでも世界ごとひ
っくり返してやるよ」

カインお兄さまが、ぶっきらぼうにわたしの頬を指先でつつ
いた。

この温かな檻の中で、わたしは一生、彼らの可愛い小鳥として
生きていくのだと信じて疑わなかった。

彼らの血を分けてもらい、人間を辞めて、彼らと同じ吸血鬼
の眷属になる、その日まで。

まさか、自分の中に、彼らをも狂わせる『最悪で、最高に淫

らな本能』が眠っているなんて、この時のわたしは知りもしなかったのだ――。

吸血鬼の眷属

「お兄さま、お願いがあるのです」

「なんだ。お前からおねだりとは珍しい。絶対に叶えてあげなければな」

庭先の新緑が、暖かな春風に揺られ、穏やかな陽光に照らされた気持ちの良い昼下がりのこと。

わたしは、空のティーカップを手に、レスターお兄さまの膝の上にちょこんと座らせてもらいながら、整った顔を見上げる。

縦に伸びた赤い瞳孔で、こちらを見下ろし、やんわりと口角

を緩ませて、顎髭で頬をくすぐる。

じより、とした質感に、恥ずかしさとくすぐったさが胸の中に広がる。

いつもなら「重いですから」と遠慮してしまうわたしを、お兄さまが「気にするな」と強い力で引き寄せた結果だ。

遅い腕に閉じ込められながら、以前のわたしなら顔から火が噴き出そうな淫猥なお願いを、お兄さまにカップを差し出して口にする。

「この中、いっぱい、お兄さまの精子を溜めてくださいませんか……？ わたし、朝から奥が疼いて、我慢できないのです……」

自分でも驚くくらい、クスリと不敵に笑い、いつになく甘い声でおねだりをする。

奥に沈んだ自制が「なにを言っているの」「そんな下品な我儘、許されると思っているの!？」と抗議をするが、反対に表面化した本能が、「わたしだから許されること」だと高飛車に胸を張る。

お兄さまたちとの平穏な毎日しか望まない――あの日の純真で、無垢で無欲を装っていたわたしの心は反転してしまった。

その出来事が起きたのは今から約一カ月前のこと。わたしは、謎の高熱に魘されていた。

どんな薬も、治療も通用せず、後は死を待つだけだったわたし

しただけだ。

たったひとつだけ助かる方法があった。

それは、お兄さまたち、吸血鬼の眷属になること。

儀式を経て、人間であることをやめ、お兄さまたちの手によって眷属——吸血鬼になるはずだったが。

でも、突然変異で、淫魔へと堕ちてしまったわたしは、死にくい身体と引き換えに、お兄さまたちの血ではなく、濃厚な「精」だけを欲するようになってしまったのだ。

吸血鬼が血を吸って生きるように、淫魔も、生き物の「精」を吸って生きる。

わたしは、お兄さまたちの精無しじゃ生きられなくなっ

まった。

お兄さまは、わたしを生きながらえさせるべく、致し方なしに抱いてくださったのだが——その時の極上の精の味が、忘れられなかった。

火照った熱が昇華され、高い絶頂に上った時のような、脳内全体に、多幸感が満ちたあの時の刺激。

いつも、蝶よ、華よと慈しむような視線で見守られ、庇護してくれたお兄さまたちが、餌を前に涎を垂らす飢えた獣のように雌の身体を貪る感覚が癖になってしまったのだ。

——お兄さまたちが、吸血以外でこんなにわたしをもとめてくれるなんて。

求められることが癖になってしまったわたしは、人間の時のような身の程を弁え、慎ましやかな感情で生きることをやめ、お兄さまに甘えた。

お兄さまたちは、積極的に求めるわたしに戸惑っていたが、やがてわたしに「食事を与えること」と「血を分けてもらう」という建前で、受け入れるようになっていった。

アランお兄さまやカインお兄さまはわたしがこの屋敷に住む前は、人間の暮らしに溶け込んでいた。性欲もそれなりにあったみたいで。

お腹を空かせていたり、欲求不満で身体を持て余していると、抱いてくれるようになった。

でも、お兄さまたちは、四六時中、屋敷にいるわけではない。

アランお兄さまは、魔法が得意で、よく人間の国に行つては国のお偉い方に魔法を教えている。この屋敷がある土地に隣接している国でもあるので、この地を守るといふ意味でも、お兄さまの魔法技術は、必要なものだ。

カインお兄さまは好戦的な性格で、たまに趣味で傭兵をしに出掛けていってしまう。たまに、レスターお兄さまの願いで遠くの国に行つてしまうことはあるけれど。基本は夜になるとこの家に戻ってきてくれる。

となると、屋敷で一緒にいる時間が長いのはレスターお兄さ

まで、自然とレスターお兄さまとえっちする回数が多くなる。お兄さまたちは、わたしの血の効果で吸血行為の回数が減っているけれど、わたしの場合は燃費が悪いのか、一日に三回は、精を必要とする。

人が、一日三食の食事を取るように推奨されるのと同じだ。淫魔になってからは、そのような生活が毎日のように行われていて。

もう何十回と、こういう行為は続けているつもりなのに。

レスターお兄さまは、まだ馴れていない様子だった。

人間の頃らしからぬ態度でお誘いをする、いつも冷静なレスターお兄さまの赤い目が見開かれる。

信じられないようなものをみたかのように息を呑んだ。

お兄さまになんて無茶なお願いをしているのだろうと言う罪悪感が、興奮と欲望で塗り替える。

性欲と食欲が交じった、熱っぽい声で、甘く首を傾げる。

「お兄さまあ……♡、わたし、お兄さまのでかつよおちんぼ汁、飲みたいなあ……♡」

はふ、と熱が籠った吐息が噴き出ると、部屋の空気が一変する。

わたしの身体から無自覚に溢れ出る桃色の魔力——男を惑わす淫魔の甘いフェロモンが、熱気と共に密室を満たしていく。

その香りを吸ってしまったからか、レスターお兄さまの肩が

ビクリと跳ねた。

熱い胸板に、頬を擦りつけて「おねがい♡」ともう一度懇願すると、血管が破れんばかりに浮き出た腕が、執務机に積み上げられた書類を払い落とした。

ペンやインク瓶も一緒にカーペットの上に甲高い音を立てて落ちた。

墨のようなつんとしたインクの匂いが広がる。

まっさらになった執務机をベッド代わりに肩を押して、わたしを押し倒した。

紅潮した頬に、情欲に視線を潤ませ、シャツのボタンを外す時間も惜しいのか、自らの服を破り捨てていく。

襲われるとは思っていなくて、今度は、わたしがレスターお兄さまの変容っぷりに驚く番。

食事を前にした肉食獣のような攻撃的な視線でわたしを見下ろし、両手で持っていたカップをひったくると、邪魔だと部屋の隅に投げ捨てた。

——普段のレスターお兄さまなら、こんなことしない。

傭兵のカインお兄さまならともかく、他に対して、冷徹なまでの冷静沈着なレスターお兄さまが、感情のまま物を粗雑に扱って、わたしを押し倒すなんて、相当、淫魔のフェロモンに当てられたのだろう。

淫魔の力、すごいなと感心しつつも、『食事』の時間に、気持

ちは浮足立つ。

「カップ、割れちゃった……」

「——すまない、つい投げてしまったんだ」

覆いかぶさったお兄さまのくびれた越しに足を撒きつけ、すぐに挿れやすいようにショーツを脱ぎ去る。

前戯なんて、必要ない。

カップが割れてしまっても、『ここに』、変わりがあるのだから。

お兄さまのベルトの金具をほどこきながら、にっこりと笑みを浮かべる。

「大丈夫です。お口じゃなくても、ここに注いでただけで

ば……♡」

ドレスの胸元をはだけさせて、はしたなく大股を開く。秘裂を割って赤く色づいた粘膜をお兄さまの眼前に曝す。

今日、起きてから、ここに至るまで。

お兄さまとの行為を何度頭の中で考えてきたか。

その証拠に、粘ついた愛液が、おまんこを纏い、光沢を放っている。

既に、準備万端だと雌孔を引くつかせると、血管が切れそうなくらい浮き出た怒張が、ビン♡と切っ先を天井に向ける。

飢えた赤い瞳がわたしに集中する。

義妹として、大切に育ててくれていたのに。淫魔の魔力によ

って、その取り繕っていた皮が崩壊していく。

その熱が向けられることが——たまらなく愛おしい気持ちになる。

だから、わたしは、精一杯媚びる。

腰をへこへこさせて、ダンスを踊る。

「お兄さま、早くう……♡」

「やめなさい。とても、下品だから……」

「お兄さまは、下品なわたし、嫌いですか……?」

左手で、レスターお兄さまの幹を捉え、膣口にくちくち♡擦りつける。

苦笑して眉を下げて、お兄さまは首を振った。

「嫌いじゃない。むしろ好きではあるが……、少し落ち着きなさい」

理性と、本能の間で揺れ動いている様子だった。

めちゃくちゃにしてくれていいのに、わたしを壊さないようにと最後の良心を保ってくれているのだ。

その良心も、今のわたしには煩わしいことこの上ない。

「お兄さまが、断るなら、今は我慢して、カインお兄さまに抱いてもらっちゃおうかな？ カインお兄さまなら、わたしの意志なんか関係なく、おまんこガンガンに突いて、容赦なく、びゅーびゅーって、精子注いでくれるから、そっちいっちゃおうかなあ……？」

「カインに、だと……？」

レスターお兄さまの、眉がピクリと吊り上がる。

レスターお兄さまはカインお兄さまのことが苦手だ。

冷静なレスターお兄さまと、男らしくてちよつと雑なカインお兄さまは馬が合わない。

互いに対抗意識を表面化して燃やすほどではないけど、意識はしている。たまに、わたしの血を吸う順番や、晩餐会の時などでも小さな争いが起きているほどのだから。

元々三人が、仲が悪かったのだと伺わせる。

名前を出すと、少し機嫌が降下するお兄さまも可愛いな、と。

わたしは、さらにレスターお兄さまの感情を刺激する。

「その後、アランお兄さまのところに行って、カインお兄さまの精子を上塗りしてもらいます……♡。レスターお兄さまが、可愛がってくれなかったって言ったら、わたしがお腹いっぱいになるまで、身体にいっぱい精子かけてくれるから……

♡」

アランお兄さまは、嫉妬深い。他の男性の精子を垂れ流しにしたら、怒って、朝まで抱き潰してくれる。

「アランお兄さまの精子の量は、兄弟の中で、一番多いから食べ甲斐があります……♡」

愛しい女の子として扱うのではなく、性欲を処理する肉便器

みたいに厳しく抱いてくれるのだ。

そして、最後は、自分の物だと証明するためにお腹の奥におしっこをかけて、「しばらく僕以外の男に抱かれるの禁止ね」と、全部を洗い流す。

アランお兄さまとのえっちも濃厚で素敵だった。

淫魔の気まぐれでうつろいやすい本能が囁く。

レスターお兄さまが抱いてくれないければ、他の男のところへ行ってしまうと、尖った耳に、吐息を吹きかけて、嫉妬心を刺激する。

そして、確かめる。

わたしに、この家で、ちゃんと居場所があるのか。レスター

お兄さまの気持ちには、まだここにあるのか。

求めてくれるのなら、ひとまず、安心できるから。

フェロモンで、性欲を煽って、理性の働きを鈍くさせる。

他の男と比較されたことの悔しさに、自分にかけたブレーキが押さえきれない歯がゆさでレスターお兄さまは眉間に皺を寄せる。

けれど、表情の硬さはわずかに緩んだ気がした。

もう一押しだと、今までの経験が語る。

「でも、お兄さまも大好きです♡」

膣口に当てていたカリ首を、お兄さまの許可なく、浅いところ深くぽくぽ♡抽送して遊ぶ。

子宮が早く欲しいと口をくばくばさせているのが、お腹の奥から聞こえてくる。

瞼を閉じて、レスターお兄さまとの情事を思い出す。甘く激しい時間の、その感想を伝える。

「レスターお兄さまはオナニーをしていないからか、いつも濃厚な精子を、わたしの中に注いでくれて、いつも孕んでしまわないか、心配になるのです……♡」

「はしたない言葉を、どこで覚えたんだ……ッ」

「カインお兄さまです……。♡。わたしみたいな誰でも股を開く女は、肉便器っていうのですって♡。わたし、お兄さまたち専用の肉便器なら、喜んでなっちゃいます♡」

「べん……ッ！ そんな汚らしいものじゃないだろう」

「お兄さまたちの肉便器になれるなら、汚くてかまいません♡。お兄さまは、わたしとするの、嫌ですか？」

子宮口の開閉の音に合わせて、心臓の鼓動の感覚もどんどん狭くなる。

部屋が嫌に静かなせいで、心臓の音が鮮明に聞こえてくる。鼓動を音として刻む度に、言わなければよかったという後悔が押し寄せる。嫌われてしまったのではないかという不安が胸の中に広がっていく。

けれど、不安を本能が飲み込む。淫魔という生き物はこういうものだから、えっちであればいいのだと。都合の良いように

脳が解釈を変える。

はやく答えて、お兄さま。

じっと、答えを待つと、レスターお兄さまは、喉をうならせて悩んだ。

そんなに、悩まなくていいのに。

——と思うが、沈黙が続くと、やがて正気が「レスターお兄さまは下品な子が嫌い、きつと嫌われてしまった」のだと嘆く。

空気の冷やかさが、冷静な思考を呼び覚ます。

やっぱりやりすぎてしまったのだと思うと、ほぐれていた身が強張った。

熱が少しだけ冷めた、震えた声で、潤ませているレスターお兄さまの赤い瞳を見つめた。

諦めて、身をよじろうとすると――。

「おに――い、ッ！　ん、おッ♡、ッさ、まあ~~~~~」

ッ♡♡

起き上がろうとした時、肩を机にぐつ、と押し戻されて、ゴン、と音を立てて頭がぶつかった。

遅れて、お腹の奥が、ズンッ♡と重石を乗せられたみたいな衝撃で包まれた。

矢じり型の亀頭に奥を小突かれ、圧迫される。

「はッ、きゃッ――♡」

蕩けた肉壺がぐにやり♡と変形する感覚が愛おしくて、べろん♡と興奮で色づいた真っ赤な舌を垂れさせて、必死に肉棒に媚びた。

「ぶつといの、きたあ……♡」

「んッ……♡」

レスターお兄さまのものが中に入り込んだことで、子宮がぐぐ♡と下に降りてくる。押しつぶす切っ先に口を薄くあけて、ちゅぱちゅぱ♡飴玉を舐めるみたいに吸い付く。

ずんずん重たい刺激に、白目を剥いてしまいうさだ。

「おッ♡、おッ♡、きもちッ……♡」

「俺も、気持ちがいいよッ……♡」

ぱちゅ♡、ぱちゅ♡、ぱちゅ♡、ぱちゅ♡。

ゆるゆると動く視界の中。レスターお兄さまは涼しい顔をしてはいるけれど、興奮で頬が赤く色づいている。とがったお耳を、お腹の中で震えているおちんちんと一緒にぴくぴくさせているところも可愛らしい。

「ん……ッ♡、どこが、気持ちがいいですか？」

「どこがって、全部だよ。優秀なんてつけられない」

レスターお兄さまが困った笑みを浮かべる。具体的に答える恥ずかしさもあったのか肩を竦めて誤魔化そうとする。

わたしは、そうはさせないと膺をきゅう♡と引き締め、笑みを深める。

「初めての吸血も、処女も、レスターお兄さまに捧げたのに、答えてくれないのですか……？」

「それは……」

わたしは、こんなに気持ちがいいのに。こんなにも、お兄さまとの情事に興奮しているのに。

お兄さまは、抱いてくれるし、愛も囁いてくれるけど、具体的な感想を言ってくれない。

わたしだけ、思いが一方通行しているのだろうか。

もしそうなら、わたしは……。

焦って、つい意地悪を口にしてしまう。

「それとも、わたしのおまんこより、他の女の子のおまんこ

の方が気持ちいいですか……?」

「何故、そう思うんだ」

「だって、お兄さまが答えてくれないんだもの。お兄さまは言いづらい話はいつも、話題を逸らそうとするから。……もしかして、わたしとのえっちの時、他の想い人と重ねていらつしやるのかしらって……」

お兄さまの瞳が、悲し気に翳る。

律動していた動きが、ぴたりと止まった。

「——本気で、そう思っているのか?」

「お兄さま……?」

お兄さまたちが、わたしを大切にしてくれていることはわか

っているけれど。それは、血のつながりのない妹としてだ。

女として、恋人として、好きな方が他にいらっしやるのかもしれない。

そう、思ってしまうと少し悲しくなる。

お兄さまたちの関心や、愛情が別の人に向けられるのではと思うと、どす黒い感情が、じりじり、胸を焦がしていく。

「でも、いいんです」

だから、少し物言いがとげとげしくなってしまう。

「もし、そちらの方が気乗りすると言うのなら、今だけは想い人のように、抱いてください♡♡。わたしは、淫らで、下劣で、下品な淫魔。お兄さまにどう精子を注いでもらうか、お腹

を満たすか考えられない淫魔ですもの……♡」

膣が、そうだ♡と上の口に同意するみたいにきゅんって締まる。引き締め、過剰に反応した雄槍の血管が浮き出て、どくん♡って跳ねたのがわかる。

より、気が乗るように、指に唾をつけて、お兄さまのはだけたシャツから覗く、小さくて可愛いピンクの乳首に、指を這わせて旋回させる。

もどかしい刺激に、レスターお兄さまの太い首から出ている喉仏が嚥下した。

レスターお兄さまはもちろん、アランお兄さまにも、カインお兄さまにも想い人がいると思うと、気が狂ってしまいそう

だ。

それだけ、わたしは、それだけ三人の義妹という立場に慣れてしまっている。

失うことしか知らなかった孤児の時より、大きな希望を持つことに慣れてしまったせいで、大切なものを失う絶望を味わいたくないのだ。

嘘でもいい、この場のノリでもいい。今だけは、わたしだけに集中して欲しい。

心の中で切望しながら、レスターお兄さまの首筋にキスを落とす。

まったく反応する気配がない。

やっぱり、無理を言ってしまったのだと、反省していると――

「え？　――きゃあッ！♡」

足を高く持ち上げて、レスターお兄さまが机に乗り上げる。

大きな執務机がミシリと悲鳴を上げる。頑丈に作られた天板は二人分の質量を乗せても壊れることはないけど、音色の不協和音が壊れてしまわないかという恐怖を煽る。

ベッドとして使用できるように設計はされていないため、お兄さまは狭そうに上体を前屈みにして、高く持ち上げられた腰の上に、腰を掛けるみたいにお尻をくつつけてくる。

亀頭に、重たく吸い付いた子宮口はぷるぷる♡小刻みに震え

て、その重さに耐えている。

密着感と窮屈さが増した体勢に、鼓動はどんどん跳ね上がる。

「愚かで馬鹿で、愛おしい勘違いをしてくれる」

押し潰されそうな密着感の中、レスターお兄さまの低く、地を這うような声が耳に届く。

前屈みになったお兄さまの白髪が、わたしの鎖骨のあたりに
はらはらと落ちてくすぐる。

くっぽり♡肉壺のくぼみにしっかりとカリ首をはめ込んで、
叱りつけるみたいにお尻を動かして奥を擦りつける。

「おッ♡♡、ゾおッ♡」